**留学生報告　日本と違うヨーロッパのコロナ事情　市の対処と市民の反応**

報告者：19-20年度グローバル補助金奨学生　**川井　大介**

（松戸ＲＣ推薦　ホストクラブ：イギリス・ロンドン）

**1. 当初アジアで広まった時の市内の様子、またどのように感じていたか？**

 　当初アジアでのみ新型コロナウィルスの被害状況が顕著であったが、イギリスでのメディアにおいては、いわゆる国際欄には載っていても、主要な一面やテレビでは報道されていなく国民の危機意識はそこまで高くなかったと思われます。しかし、日本人である私は数多くの中国人がイギリスで学んでいたり、働いているため国境の行き来が盛んであることからも、危機管理の意識を忘れてはならないと感じました。そのため、2、3月のその時期から既に日本から持ってきていたマスクを着用していました。

しかし、イギリスをはじめとする西欧ではマスクを付ける習慣がなく、マスクを着用するということは自分が重症患者であると意味するため、マスクを着用することに抵抗感があったのも事実です。実際に、その時期にマスクを着用して電車に乗り、学校へ向かうと、白い目で見られたり、隣の座席に座っていた人が他の席に移動したりすることもありました。

**2. 緊急事態宣言発令後、市内がどのように変わったのか？**

 　欧州でイタリアやスペインで最初にパンデミックが起き、多くの死者が出た後にようやくイギリスでもロックダウン(封鎖)の宣言が出ました。しかし、それまで当初英国政府は国民の60%以上の人が新型コロナウィルスにかかることで、免疫を持ち、状況を収束させるという集団免疫政策を取りました。しかし、その後インペリアルカレッジロンドン(理系の最高峰の大学)が出したデータによると多くの人を犠牲にしてしまうということで、政府はその政策を急転換させました。

政府がロックダウン政策を取り外出制限を設けた後、一般市民も危機感を持ちはじめたのか、町中のスーパーや薬局で買い占めが起き、お水やティッシュやトイレットペーパーが全て無くなりました。幸いなことに中国でパンデミックが始まった段階で私は危機感を持っており、それらの必要物資を先に買っておいたため、なんとかなりました。市内の人達がマスクを着用しはじめたのはその頃からです。

しかし、マスクを着用しているアジア人に対する差別などは多く、私自身も三回ほど経験しました。例えば、タクシーの乗車拒否などです。私は日本人ですが、ヨーロッパ人からしたらアジア人は全て中国人に見えてしまうのも仕方ないかと思いました。

**3. それに対し、どのように対応したか？（社会、学校、クラブ）**

学校側は政府のロックダウン宣言後すぐにキャンパスを閉鎖し、全ての授業をオンラインに移行しました。政府は留学生を含めて一般市民にも何か特別なサポートを提供することはありませんでした。ただイギリスは国民皆保険(NHS)で医療費が無料であるため医療負担を減らすために熱が出て苦しくても1週間は家に自宅隔離をした上でのみ病院での受診ができなかったため、ロータリーロンドン地区からは奨学生全員にメールで帰国できる人は帰国してもらって構わないという旨を伝えられました。私の所属しているエンフィールドクラブからは集まりが全て中止になったためなるべく落ち着くまでどこにも出かけず自宅待機でいて欲しいと伝えられました。全ての機関がどう対応していいかわからないまま手探り状態で、全ての予定をキャンセルした形でした。

**４. 新型コロナウィルスの影響を受け感じた事。（まとめ）**

今までの項においても自分の所感を述べてきましたが、一番強く感じた事として、この時期に新型コロナウィルスの影響を受けて留学を中断せざるを得ない悔しさがあります。授業や教授からの指導に関しては引き続きオンラインで日本でも行えますが、もっとロンドンという土地で様々な事を経験したかったです。

しかし、状況的に現地でこれ以上滞在するのは現実的でなかったことや、日に日に大きくなる差別や医療を受けるのが難しいことなどからも日本に帰らざるを得なかったです。それに対してエンフィールドクラブもそうした方がいいと言ってくださいました。しかし、私としては四月に卓話の約束があった事や誕生日をお祝いしてくださる予定など多くの行事あったのにも関わらず、エンフィールドの皆さんと直接挨拶も出来ずにこのタイミングでお別れしなければならないのは残念でなりませんでした。非常に残念でなりません。

この新型コロナウィルスの状況は今後1年間最低でも引き続き影響が出ると思われますし、自分自身まだやりきれなかった事が多く、次イギリスに戻れるのはいつなのかとよく考えてしまいます。

また、国際政治や安全保障を学ぶ者として中国の一帯一路政策によって欧州との経済圏が強まった事からイタリアやスペインを起点に、欧州でもCovid-19が流行りました。しかし、国連常任理事カ国のメンバーでもある中華人民共和国が国際的な謝罪もなく、自国の政策の失態を反省するどころか、他の国々は我々から学ぶべきだと宣伝し風聴するような事は、国際社会における大国としてふさわしいものかと疑わざるを得ません。また近年の米国第一主義や英国の欧州離脱から見られるように、多くの国が内向きになってきている中、今回のパンデミックによって、国境が封鎖され、グローバライゼーション(グローバル化)が揺り戻しかのように顕著に消えつつ見えます。そのような中で、コロナ後の世界で(アフターコロナ)、国境を超えた国際的な連帯と協力を我々はどう維持していくのか？これはロータリーの理念と通ずるものであると思います。また地図上、引っ越しができない隣国である中国との付き合い方などに関しても、日本としてどのように世界と今後関わっていくか、ロータリーアンをはじめとするロータリー学友会や我々奨学生は一緒になって考えていく必要があると考えます。

以上

報告者：19-20年度グローバル補助金奨学生　**工藤　幸介**

（銚子ＲＣ推薦　派遣先：スイス・ジュネーブ）

**1. 当初アジアで広まった時の市内の様子、またどのように感じていたか？**

　当初アジアで新型コロナウィルスが広まった際には、ニュースは入って来ていたものの、ジュネーブではまだまだ対岸の火事といったような状況でした。たまに中国から来たと思われるアジア人がマスクをしているのを見かけましたが、元来ジュネーブではマスクをする人を見かけることが稀なので、街行く人々もその様子にどこか怪訝な視線を向けておりました。私自身、パンデミックの恐ろしさを体験したことがなかったので、アジアでの動静を注視しつつも、普段通りの生活を送っていました。

**2. 緊急事態宣言発令後、市内がどのように変わったのか？**

　スイスで緊急事態宣言が発令されたのは3月16日（月）でした。緊急事態宣言発令後は学校や企業はオンラインへ移行、公共施設は閉鎖、市内の店も生活必需品を取り扱うスーパーと薬局のみが営業している状態となりました。それに伴い、街を往来する人数も減り、普段からどこか閑散としているジュネーブではありますが、そこにさらに拍車がかかった状態となりました。ただ、散歩やランニングをする人を見かけることが増えたのは興味深かったです。また、営業しているスーパーも、当初は自由に出入りできたのですが、徐々に入店人数規制がかかりました。店の前では2m間隔の行列ができ、さらには入店時に手指消毒を徹底するようになりました。

**3. それに対し、どのように対応したか？（社会、学校、クラブ）**

　社会的な対応としては、全体としては各々が自覚ある行動を取っていたのではないかと思います。一時期、いわゆる買い占めでスーパーの棚が空になることもありましたが、それも数日が経過すると落ち着きました。その要因としてはスイス政府が、国境は閉鎖するが物流は止めないと明言していたことが大きいのではないかと思います。

　学校の対応としては、スイス政府が非常事態宣言を発令する前の3月12日（木）に学校側から「これから1週間の休校の後に、今学期末（6月）までは完全にオンラインに移行する。」との連絡が入りました。また同時に、コロナ対策チームも結成され、学生の相談窓口になるとともに、定期的にコロナ関連の連絡が入るようになりました。オンライン授業移行後は、学生も教授陣も慣れない状況の中、お互いに協力しながら授業やプロジェクトを進めています。

　現地のロータリークラブは、緊急事態宣言発令後は例会に保健の専門家を招いたりして、勉強会を開催していました。また、発令数週間後には例会もオンライン（ZOOMというツールを使用）に移行し、コロナ状況下でも精力的に活動している印象です。

**4. 新型コロナウィルスの影響を受け感じた事。（まとめ）**

　戦争を経験したこのない私にとって、実際に世界中の国境が閉鎖され、人の移動が制限されることがあり、当たり前の日常だと思っていたことが当たり前ではなくなることがあるということを実感できたのはとても大きいと思います。自分にとって大切なことは何なのか。今後どうしていきたいのか。このような問いかけをし、自分自身の本質を見つめ直す良い機会でもあるのではないかと感じております。

また、新型コロナウィルスにおける各政府や企業の対応、また人々の反応を見ると、つくづく、世の中に溢れている情報を自分自身で見極め、消化し、判断していくことの大切さを感じさせられています。そして何より、このような状況下においても家族や友人が健康であること、また私自身も特に不自由なく大学院で勉強を続けられているということに日々感謝しております。

以上